

D 9 農村住宅の住宅内空間の構成変化と非日常的生活における部屋などの使われ方からみたその要因（奈良県磯城郡田原本町薬王寺の場合）

大阪工業大 塩谷寿翁

目的：標題の集落を対象に、①畿内の農村部の住宅の建築的な構成と部屋の使われ方との昭和30年代の前半から50年代の前半に亘る時期における変容動向、と②それに関与する生活的条件、とを事例的に解明しようとする。方法：小稿では実態調査<sup>(1)</sup>の結果を基に、既報<sup>(2)</sup>で明らかにした、「原型」<sup>(3)</sup>の平面構成（間取りの形式）の展開の過程及びそれに対応する空間特性（主屋の床上部分の室内仕様の特性）の変化、に内在する秩序性とその要因の一端を非日常的生活（人生儀礼；婚姻・葬送）における部屋などの使われ方の変容の動向から追究する。結果の要約：①農家建物の各部分が非日常的生活の各過程において機能的に対応する使われ方が存続・継承されている。とくに②主屋一階の床上部分では、日常的生活（日常的接客生活、家庭生活の一部）に機能しつつ非日常的な生活に対応するとみられる座敷様のしつらえが表側空間から内側空間へと拡がっている。また平面構成の展開に伴い「四間取り部分」が日常的には空室となり非日常的生活に対応する空間として準備される傾向が認められる。また③昭和40年代の後半期以降の主屋などの建て替えを伴った建築更新を契機として、近隣生活の隣家関係にみられた非日常的生活（特に葬送時）で相互に住宅内空間を共用する使われ方は喪失しつつある。

(1) 標題の集落を対象に昭和54年12月より実施（全世帯155戸のうち68戸を占める全農家一昭和50年現在一を対象にし、住宅の平面構成の変化の年次的な対比の可能な46戸を選びうち29戸について実態調査した）。

(2) 本研究の一部は拙稿「都市近郊における農村住宅の建築的構成と住生活の変容に関する研究（奈良県磯城郡田原本町薬王寺の場合）その1建築的構成の変化」『日本建築学会論文報告集』第326号、昭和58年4月pp.135～146及び拙稿「同その2住生活の変容」『同』第333号、昭和58年11月pp.109～119、などとして公表した。

(3) 昭和20年代における調査対象集落の農村住宅の主屋の標準的な間取り形式。